『三つのちかい』

福岡県福岡市
今宿少年剣道部
小学４年生　　三　苫　大　起

ぼくは、４年生です。１年生の11月から剣道を始めました。１、２年生の時は、素ぶりなどしかしてなかったのでへたでしたが、３年生の時に、初めて面をつけてから、やっとこのごろおもしろくなり始めました。

剣道で学んだことは、三つあります。

一つ目はあいさつです。

ぼくのお父さんも、剣道をしています。小さい時から、「あいさつは、大事だ。」と言われていました。保育園の時は、「あいさつが、大きい声でできるね。」といっぱい、ほめられていたけれど、何でほめられているか、ほめられている意味が分かりませんでした。１年生の時、お父さんにあいさつの意味を教わりました。あいさつは相手に気持ちを伝えるとか、自分と相手を元気づけるものだということが分かりました。ぼくも、「本当にそうだなぁ。」と思います。小さい時に教わっていてよかったです。けれど、剣道をする友達はみんな大きな声であいさつをするので、前みたいにほめられることも少なくなりました。剣道の時でも、生活の中でもあいさつができていないような気がするので、これからは、もう一度お父さんに教えてもらったことを、よく思い出して元気にあいさつをして、みんなと元気を分け合いたいです。

二つ目は友達とのことです。

ぼくには学校のクラスの友達がいます。放課後に遊ぶ友達もいます。そして、剣道をするようになってからは、さらに友達が何人も増えました。ぼくは今の道場に来る前に他の道場で少し習っていました。なので、剣道で友達になった人がたくさんいます。今でも、前の道場の人たちと試合会場で会うと少し話をすることがあります。だから、道場はちがってもまだ、友達です。今の道場では、学校がちがう人とか、学年がちがう人とか、クラスがちがう人とかとも知り合いや友達になりました。同じ道場だけど、けい古の時とかに負けたりするとちょっとくやしくなったりしますが、同じチームで試合をする時は力を合わせる仲間です。けい古の時だけではなくて、家の近くで遊んだりすることもあります。これからも、もっと友達を増やしていきたいです。

三つ目は目標を見失わないことです。

今できていることではありません。でも、剣道をするようになって目標に向かってがんばることを考えるようになりました。１、２年生の時は、ぜんぜん考えたことはありませんが、勝つためにどうしたらいいかとか、目標のことを考えるようになりました。生活のことだと、宿題とかができてないと、

「学校の勉強が大事だから宿題がきちんとできてないなら、剣道をやめなさい。」

とお母さんが言います。ぼくは剣道はやめたくないので、剣道も続けるためにがんばって宿題をします。最近は、学校に行く前の時間があるときとかにも勉強をすることがあります。そうすると、学校や道場から帰ってきても楽になるので、がんばってやっています。これから５年生、６年生になっていきますが、自分が決めた目標を見失わないように、強い心になるようにみがいていきたいです。

これからも、剣道で学んだ三つのことをいつも思い出すようにして、けい古をがんばり、先生から教わった技や守りをもっと覚えて、強い剣士になりたいです。

『会長先生が言いたかったこと』

茨城県古河市
総和剣道クラブ
小学５年生　　翁　川　貴　成

ぼくが茨城に引っ越してから、ちょうど２年が経ちました。ぼくは、火木の通常けい古だけではなく、毎日けい古する強化に入りたくて、自ら志願して強化メンバーの一員に加えて頂きました。

毎日のけい古の中で、「何のために剣道をするのか」ということを、今まであまり考えたことはなかったのですが、最近、このことを深く考えることになる事件がぼくの身の上に起こりました。それは、望月厳会長先生が亡くなられたことです。

会長先生に指導して頂いた期間は短いものでしたが、ぼくは、体の小さい会長先生の広くて大きな心に見守られながら、強化に入る時も、自信がなくてぐずぐずしていると、「先生は翁川なら厳しいけい古にもついていけると思うから、自分から志願しなさい。」とぼくの背中を押してくれました。

やがて、会長先生が闘病生活に入り、道場に来られなくなった時、先生に部員全員で手紙を書きました。その時ぼくは、「ぼくも一生懸命がんばるから、会長先生もがんばって病気を治して下さい。会長先生には、まだまだ沢山のことを教えてほしいので、必ず道場に帰って来て下さい。」と書きました。後で聞いたのですが、会長先生は口ぐせのように、「私は必ず道場に戻るからね。」と笑顔でおっしゃっていたそうです。

「一生懸命がんばる」という言葉は、ごく普通のどこにでもある言葉ですが、ぼくにとっては大変重要な言葉となりました。それは会長先生が入院していた時のことです。とても具合が悪くて、点滴をして寝ている会長先生は、意識がハッキリしている時と、意識がもうろうとしている時があって、ぼくがお見舞いに行った時は、目を開けていたので、先生はぼくの手を握って、ゆっくりと、一音一音「いっ・しょう・けん・めい…」とかすれた声で言うと目を閉じて眠ってしまいました。それがぼくにとって会長先生の最後の言葉となりました。会長先生の言葉は途中で途切れてしまいましたが、ぼくには次に何を言おうとしたのかはっきりわかります。

剣道に限らず、何事にも一生懸命打ち込むことは、時には辛いことがあります。ぼくの毎日は、忙しくて、時間がなくて、やることが沢山あるので、くじけそうになるのです。でも、一つ一つ根気よく、コツコツとこなしていくうちに、結果となって表れます。実際に、陸上の県大会では決勝に進出することができましたし、夏休みに毎日学校に通って練習したチェロの演奏では、ＴＢＳこども音楽コンクールで優良賞を頂くことができました。また、市の水泳大会では、自己記録を10秒以上縮めることができました。

一生懸命がんばることは、大変なことであっても、不可能を可能にするし、幸せな気持ちになれるということなのです。

辛くてもコツコツとくじけずに努力すること。真剣に一生懸命がんばること。元気に明るく楽しく

取り組むこと。無理かもしれないことであっても、恐れずに、あきらめないで最後まで貫くこと。これはいつも母がぼく達兄弟に話している「根気」「やる気」「元気」「勇気」の、大切な四つの「気」なのです。

ぼくは、剣道を通して心の強い人間になりたいと思います。それには、母がいつも話している四つの「気」を大切にして、何事にも一生懸命がんばれば、いつか必ず心の強い人間になれるのではないかと思います。そこでぼくはもう一つ、「気合い」の「気」を入れて、五つの「気」で元気いっぱい一生懸命がんばりたいと思います。きっと会長先生は、そのことをぼくに伝えたかったのではないでしょうか。

会長先生、どうか、ぼくとぼく達総和剣道クラブの皆を天国から見守っていて下さい。

『夢をかなえよう』

滋賀県近江八幡市
八幡西清流館道場
小学６年生　　戸　川　あやめ

「あの舞台に立ちたい。」それは今から３年前、私が３年生の時に、５年生で活躍していた姉を見て思ったことです。あの舞台とは、全日本都道府県対抗少年剣道優勝大会のこと。私は、大きな会場と迫力のある試合を見て感動し、私も滋賀県代表として出たいと思いました。それからの私は、稽古にも気持ちが入り、出稽古にも積極的に行くようになりました。

２年がたち、私は予選会に出場できる５年生になりました。この予選会で滋賀県代表が決まるのです。その決め方は、最初に約80人ぐらいでトーナメントを行いベスト４の４名と、ベスト８で敗者復活を行い勝ち残った１名の合計５名が選手になります。まずは、その予選会に出場しなければなりませんが、それまでの努力が認められ、私は道場の代表の一人に選ばれました。予選会当日、私は準々決勝で同学年の男の子に一本負けしてしまい、敗者復活にまわることになりました。敗者復活１回戦、自分の技が「決まった」と思う場面が何回かありましたが、旗は１本ずつしかあがらず、最後は引き面を打たれて負けてしまいました。納得できなくて、くやしくてくやしくて、涙が止まりませんでした。姉は５年生の時に出場していたので、「自分も」と必死で稽古してきたのに納得できない負け方で、剣道が嫌になりやめてしまいたいと思いました。しばらく悩みました。そして母に相談しました。すると、「４年生の時に学校の書道の時間に書いた言葉覚えている？」と聞かれました。「夢をかなえよう」と言う言葉でした。それを見た母が「気持ちの入ったいい字だねえ！」と言っていたことを思い出しました。大事なことを忘れていたような気がしました。そして、来年こそは「あの舞台に絶対に立つ！」という「夢をかなえよう」と改めて決意しました。

そして６年生になりました。予選会が近づくにつれて、昨年は全然緊張しなかったのに、今年は緊張して何も手がつかなくなったり、去年のことを思い出して不安になったりしました。そしてとうとう予選会の日がやってきました。今年も道場の代表として出場できましたが、足を痛めたせいもあり初戦から苦戦の連続でした。しかし、何とかベスト８まで勝ち上がり、次は準々決勝。ここを勝てば代表決定です。試合が始まり昨年決まらなかった得意技で一本決めることができました。「これでいけ

る」と思いました。しかし、終了間際に相手に取り返され、すぐに笛が鳴りました。「絶対に負けられへん」と気を取り直しましたが、延長で負けてしまいました。ショックで涙が出てきました。しかし先生に「まだ終わってない。泣くな！」と言われ、「そうや、まだチャンスはある！」そう思い、今年も敗者復活にかけることになりました。

去年のことが思い出され、しかも対戦相手は負けたことのある人ばかり。でも今回は絶対に負けたくない。昨年のくやしい思いはしたくない。そう思い、１回戦が始まりました。相手は同学年の女の子。始まってしばらくすると出ばな面が入りました。残り時間必死にがんばり一本勝ち。次はあの舞台をかけた最後の試合です。私は今ある力を出し切ろう！そう思いました。「始め」主審のかけ声で試合が始まりました。なかなか勝負が決まらず残り20秒になりました、私は思いきって跳び込み面を打ちました。相手は小手に応じましたが、私は「面だ。決まった」と思い審判を見ました。しかし旗はすべて相手の方にあがっています。今年もダメなのか？そう思いかけた時、旗は私の面に変わりました。そして一本勝ち！うれしい気持ちよりもホッとした気持ちの方が強く大泣きしてしまいました。だって夢にまで見たあの舞台に立てるのですから。「夢は努力すればかなう」という事を大好きな剣道が教えてくれました。次の夢は、あの舞台で勝つことに変わりました。私はこれからも努力をし、あこがれの舞台で自分の持っているすべての力を出しきりたいと思います。「夢をかなえよう」

『剣道に対する思い』

岐阜県可児市
大勇道場
小学５年生　　大　澤　瑠　紗

私が剣道を始めて、４年になります。始めたころは、何も思わずにただ剣道をやっているだけでしたが、２・３年生になって試合にも勝てるようになり、楽しみも増え、剣道を続けていました。でも、心も強くなれるようにという、先生の、優しさがある中にもきびしいけい古に、何度もたおれ立ち上がりながらも息が苦しくなる事が続き、前のように楽しみながらけい古する事ができなくなっていきました。

しかし、４年生の夏に、全国大会に６年生のチームの先鋒として出場できた事もあり、少しやる気が出てきました。

でも、この春、今まで支えてくれた６年生が卒業して、小学生の最高学年が５年生の私だけになり、キャプテンとなりました。高学年の相手がいない私に、先生は中学生とけい古をさせてくれましたが、団体戦が組めず、独りぼっちでさみしさが増えた私は、毎回のけい古が前以上にいやになり、道場の前まで行っても、しだいに中に入れなくなっていきました。車の中でお母さんにしかられながら、私は、剣道をやめようと決め、道着を着ずに体操服で道場の入口に正座をし、皆のけい古を見ていました。その内に、皆が一生けん命けい古しているのにキャプテンの私がにげていいのかと思ってきました。けい古の後、「ごめんなさい。いやな時もがんばります。」と泣きながら言った私に、けい古ではこわい先生がやさしく、「だれだっていやな時はある。見学するよりけい古の方がいいだろう。」と話してくれました。でも、次のけい古の日、道着を着て防具を持って道場まで来たのに、また中に入る

事ができませんでした。頭の中では先生と約束したからがんばろうと思うのに、なぜかよく分かりませんでした。その時も先生は、笑顔で「どうした。入れないか。今までがんばって来たからにげたい時もある。少し力をぬいていいぞ。」とびっくりする事を言われ、先生と話をしながら道場に入る事ができました。そして「準備ができたら号令をかけなさい。」と言われた私は、自分では、キャプテンの自信もなくなってきていましたが、大きな声で「整列、黙想」と号令をかける事ができ、その時「私は、キャプテンなんだ。」と強く思いました。

また、中学生の先ぱいが車まで迎えに来て「一緒にがんばろう。皆とけい古をしよう。」と言って、私の気持ちが落ち着くまで待って、一緒に道場に入ってくれた事もありました。先生やお父さんとお母さんだけでなく、先ぱいや仲間にも支えられている事がよく分かりました。こうした事が私の気持ちを少しずつ強くしてくれています。

この夏、久しぶりに団体戦に出場する事ができました。３回戦で負けてしまったけど、皆で協力して戦い、個人戦では味わえない大きな喜びを味わう事ができました。

それから、中学生が全国大会に出場したので応援に行き、そこで小学生個人の決勝戦を見る事ができました。その決勝戦の二人がにげずに前へ前へと攻める姿と、道場の中学生が協力して戦う姿を見て、私も「にげずに、がんばろう。」そして前より強く「いやな時もがんばろう。」という気持ちになりました。

来年は、道場の皆で力を合わせて夏の全国大会に出場し、私自身も個人戦の全国大会に出場して、今年の決勝戦に出ていた人のようにがんばりたいと強く思いました。

これからは、「がんばろう。」と自分で決めたこの気持ちを大切にしていき、心が弱くなりかけた時には、このがんばろうと決めた時の事を思い出し、いつも支えてくれているお父さん、お母さんに感謝して、しっかりけい古をしていきたいです。

今は、山登りに例えると、登り始めたところで、まだまだ頂上に着いていませんが、少しずつ頂上に向かって山を登っていくように私は剣道も心も強くなりたいです。

『心のつながり』

東京都渋谷区
武道学園純正館
小学５年生　　納　富　新之介

「小手あり。」

出小手で一本とったしゅん間、ぼくは、これまで一緒にけい古してきた先生や仲間との「絆」を思い出し、感謝する。

ぼくが剣道に出会ったのは、小学校２年生のとき。ぼくは、親元をはなれて１年間、九州の佐賀県に山村留学に行った。見ず知らずの人の家に寝泊りし、学校まで３キロの山道を１時間かけて歩いて登校した。毎日が不安でいっぱいだった。

佐賀といえば「葉がくれの里」。ぼくの学校は、全校児童が剣道をやることになっている。体力のなかったぼくは、登校するのにせいいっぱいで、授業どころではなかった。そんな中、ぼくは初めて剣

道に出会った。５月に全校剣道がはじまったのだ。留学生のぼくは、まず、すり足を教えてもらったが、同じことのくり返しで竹刀を手にしても楽しいと感じることはなかった。ただ、けい古が終わると必ず輪になって、先生が剣道の話をしてくれたことは、とても興味深かった。先生の話で最も印象に残っているのは、「バランスが大事」ということであった。いくら計算が速くても、国語ができなければ算数の文章問題が解けないのと同じように、いくら素振りが速くても、前に打っていかなければ、声が出ていなければ、一本にはならない。ぼくはなるほどと感心した。剣道では気・剣・体がそろってはじめて一本になるということを先生は２年生のぼくにも分かりやすく教えてくれていた。

佐賀でのけい古は週３回。そのうちの２回は早朝に行われる。冬には真っ暗な中、かい中電灯をともして学校へ行かなければならない。さらに、雪が降った日のけい古場は、まるで氷の上にはだしで立っているような冷たさだった。

東京へ帰る日が近づいた２月に校内剣道大会があった。ぼくは基本の部の試合に出場した。日ごろけい古をしているし、基本試合なら勝てるかもとうきうきした気分で試合にのぞんだ。試合ではいつもよりきれいにできたと思った。だが、主審の旗はぼくに、副審は相手のほうに上がり、ぼくは負けた。とてもくやしくて、なみだがあふれて止まらなかった。このとき初めて、剣道でくやしなみだを流した。そしてぼくは、絶対剣道をやめないと心に誓った。

ぼくは東京に帰っても剣道を続けている。東京でも多くのライバルと言える友達やすばらしい先生方にめぐり会えた。そのおかげで試合にも勝つことができるようになった。

夏休みになって佐賀に里帰りをした。山村留学のときの仲間はしばらく会わなくても、仲の良い友達だ。学校に行くと、先生から

「一緒にけい古するか。」

と言われてすごくうれしかった。みんなとけい古をすることはとてもなつかしく、自分の成長が感じられ、すごく楽しかった。面の応じ技のけい古のとき、いいところを見せてやろうと思い、得意の出小手を打ったが、つばにあたってしまった。先生から

「つばあり。」

と言われ、がくっとしたけれども、なぜかうれしかった。けい古が終わり、いつものように輪になると、先生が

「新之介、うまくなったな。剣道を続けてくれてうれしいよ。」

と言ってくれた。はなれていても先生や仲間とつながっているのだなと、とても心強く思った。

ぼくは剣道を通じて出会えた人との「絆」を大切にしている。なぜなら、ぼくはみんなに支えられて剣道をしているからだ。その感謝の気持ちが、剣道をずっと続けていきたいという思いにつながっているのだと思う。そして、この「絆」を深め、広げていくことが先生方や仲間への恩返しになると、ぼくは信じている。

『剣道の神様に感謝』

北海道帯広市
帯広徹心館
小学６年生　　菊　地　由利香

稽古をしていて、怪我をする人は沢山いると思います。剣道を始めて６年、私は小学生最後の大きな大会の途中に、骨折しました。「全国大会に行きたい。」５年生の冬から、体力をつけるため、週２回ランニングをする事に決めた。苦しくなると、弱い自分に負けて３km位で休んでしまい、辛くて私は、いつも泣きながら走っていました。最後まで走り切れない自分にいい訳ばかり考えていました。そんな私に母が言いました。

「今、努力している事に無駄はないよ。少しずつ長く走れるようになっているよ。きっと全国大会に行けるよ。」と、毎日励ましてくれて、ランニングにもつき合ってくれました。少しずつ体力がついてきて、以前よりも足さばきが早くなり、技も早く打てるようになってきました。毎日少しずつ上達しているのが感じられ学校が終わると、稽古の前に自主練習するほど、稽古に夢中になっている私がいました。

そんなある日、自主練習の休憩中、右手首に痛みを感じたと同時に、不安な気持ちがどんどんふくらんだ。先生は静かに言った。右手首骨折。全治２ヵ月だった。涙が溢れて、目の前が真っ暗になり、その日は一日涙が止まりませんでした。次の日も大会があったが、誰とも話さず、一日車の中で泣きました。２日間泣いて少し冷静になった時、私は思いました。「私が抜けたらチームはどうなるのだろう。」「私のせいで皆に迷惑がかかる。」自分の事ばかり考えて泣いていたが、チームの皆にとっても、小学生最後の大会なのだ。もう、泣いてはいられない。次の日から左手のみ使用し、素振りを始めた。もちろんランニングも続けました。今の自分にできる事はなんでもやろう、試合に出るためには、時間との戦いでした。骨折してから２週間後、手首に板をつけて、サポーターを厚くして、全道大会に出ました。相手に打ち込むと右手に激痛が走り、手に力が入らず、小手の上からテーピングを巻きました。それでもバランスがうまくとれず、左手もうまく延ばせず、相手の面に打ち込む事ができませんでした。今まで出来た事が全く出来ず私は、打たれる事が恐くなりました。そこには、自分の嫌いな弱い自分がいた。情けなかった。引き分ける事が精一杯で決して満足できる試合ではありませんでした。でも、チームの皆は「大丈夫かい？。」と優しく声をかけてくれました。骨折してからいつも、心配して言葉をかけてくれました。皆の思いに、涙があふれてきました。骨折してから１ヵ月と８日目に第45回全日本少年剣道錬成大会に出場しました。夢にまで見た日本武道館。「私はここで試合ができるんだ。」骨がバラバラになってもいいと思い、一本一本気持ちを込めて打ち込んだ。そして３回戦まで行くことができました。私に関わってくれたすべての方々のお陰であると心から感謝しました。剣道の神様は、私の心を強くするために試練を与えてくれたのではないのか。左手の素振りを沢山する事で、以前より打つ力がつきました。怪我によって、今までの自分に足りなかった物がわかりました。「すべての事は自分の心が決めるんだ。」今、私は自信を持ってそう言える。稽古中に苦しくなって来た時、負けるものかと弱い自分と闘いながら一歩一歩今より強くなりたい。相手に向かって後ろに下がらない、前へ前へと攻める剣道をしていきます。剣道ができる事に喜びと幸福を感じ、私を支えてくれる家族、仲間、先生に感謝を忘れず、これからも頑張って行きます。

『ぼくの武士道』

福島県会津若松市
会津日新館
小学５年生　　山　田　大　夢

「義・勇・仁・礼・誠・名誉・忠義・克己心」これは武士道の八つの教えです。

ぼくは、白虎剣士として、剣の道を学んでいます。そして、ぼくが特に大切にしている教えが「礼」「仁」「義」「勇」の四つの教えです。

「礼」は、礼儀作法のことだけではありません。つねに相手に心を持って接すること、つまり、悲しみも喜びも分け合い、相手を思いやる気持ちがあることです。心がなければ、「虚礼」といって、うその礼になってしまいます。ぼくも、この「心」が一番大切だと思います。

剣道では、この「礼」を大切にしています。試合の時はもちろんですが、けいこの始まりや終わりにも必ず「礼」をします。剣道の試合で勝つためには、強い心も必要です。でも、人を思いやる「礼」の心がなければ勝てないと思います。

「仁」は、愛や人を許す大きな心です。ぼくのクラスの先生は、よく「人を許す大きな心を持ちなさい。」と言います。「仁」がなくては「人」ではない。つまり、どんな時でも、思いやりや優しさは、人間が人間らしく生きるために必要なものだという教えです。

クラスの子が命れい口ちょうで友達を注意した時、先生が「今の言葉には思いやりの心はあったのか。注意するのはいいけど、思いやりの気持ちを持って注意しなきゃだめだぞ。」と言っていました。

ぼくも、少しの事でおこったりしないで、大きな心を持つ剣士になりたいです。

「義」は、正しい事をする、「武士道」の中で、もっとも大切な教えで、自分の損得ではなく、人のためにすることです。

ぼくは、まだほけつです。試合の時、仲間の選手のために、ほけつのぼくにしか出来ないことがあると思っています。そして、最高のほけつになろうといつもがんばっています。レギュラーになった時も、「義」の教えをわすれずにしていきたいです。

「勇」は、気力が強く、勇ましいことです。

勇気は、き険なことをすることではなくて、正しいことを行動にうつすのが本当の勇気です。

武士は、正しいことをするために、命をかけていました。ぼくは、命はかけられないけど、正しいことを「勇」の教えをもって実行していきたいです。

私たちは
会津白虎剣士としての誇りをもち
「ならぬことはならぬ」
という精神で
学業と剣道に精進し
根性を養うことを誓います

これは、けいこを始める前に、正ざをして全員で大きな声を出して言う誓いのことばです。ぼくは、誓いのことばに武士道の精神がこめられていると思います。

ぼくが思う武士道は、正しいと思ったことをつらぬく精神だと思います。優しさや思いやりも忘れ

てはいけません。

武士道という言葉は聞いたことはありましたが、辞書を引いたり、本を読んだりして調べてみたら、言葉一つ一つはむずかしいけれど、ぼくたちの生活にどれも大事なものばかりでした。

心の中に、武士道の「義・勇・仁・礼・誠・名誉・忠義・克己心」の教えを持って、これからのけいこをがんばり、やさしくて、強い剣士になります。

『一期一会　～剣之心～』

山口県山口市
白石少年剣友会
小学６年生　　鮎　川　直　佳

「直佳、まっすぐうつんだぞ！」

またか…。私は６年生。剣友会のキャプテンとしての役目もあり、先生が来られる前の指示、試合の時はみんなをまとめるリーダー的存在だ。それなのに、怒られてしまった。しかも同じ事で何回も。

「はい」

と、返事をする。心の中では、すごく悔しい。低学年に見られている。

「なんで？なんで？」

私はずっと、そういう事ばかり考えていた。全てが悔しかった。帰りの車の中で

「何で私は真っすぐうてないのか？」

と、母に聞くと、

「直そうと思う意識が無いからよ。」

と、言われた。そうか、私は意識してないからダメなんだ。次の練習から、きちんと意識をして素振りをしてみた。しかし、また、

「横からうつな。」

と、注意されてしまった。自分は意識しているのに、何でまた注意されたんだろう。なんで私ばかり怒られるのか不安になってきた。母は、

「意識すると言っても、注意された事を頭に入れながら練習しないと意味がない。だからノートに書いて覚えてみたら？後はやる気かな？」

絶対真っすぐにうてるよと励ましてもくれた。私は、たくさん直さなければいけない動きもあり、注意された事、良いところをノートに書くようにした。細かく書き、何度も読み返し次の練習に向かった。自然と気合いも入る。絶対に負けたくない気持ちも高まった。

秋の大会でのこと、試合会場に入り、すぐ面を並べ、素振りを始めた。しかし、みんなうちも、返事もバラバラだ。チームの仲間が個人戦に出ている時の応援態度も悪い。

「ちゃんと正座しなさいよ。」

私は、思わず大きな声で言ってしまった。怒りで、いっぱいだった。そんな時、ノートを見なおしたり、先生方の話しを聞き、まず自らが声を出す、機敏に動くことが大切だと気付いた。今までは人の悪い行動を見て注意する事ばかり考えていた。だから自分の姿を見ていなかった。次の大会では絶

対まとめてみせよう！と自分の心と約束をした。

同じ時期、小学校の運動会で応援団長をする事になった。みんなと心を一つにし、限られた時間での練習。低学年から高学年まで、まとめるのは大変だった。そんな時、

「人は、姿形ではなく行動で判断される。」

担任の先生の言葉が、私の心にグッと突き刺さった。不平不満を言い誰かの責任にしていた自分が恥ずかしいと思った。失敗してもいい。まず自らが動かなければ。短い限られた時間の中で、やるべき事を見極め、全体を見る大切さ、個々への思いやり、自分に厳しく仲間を信頼することが一致団結に繋がると気付かせてくれた。仲間や先生方のお陰で持っている力以上が出せることも実感した。そして優勝することも出来た。

小学校生活６年間、剣道経験６年間、私は厳しく指導して下さる先生、やさしく楽しませて下さる先生方、たくさんの友達、剣友会仲間に恵まれたと思う。すべて人生に、プラスになる事ばかりだ。どれだけ自分自身に吸収していけるかが大切だと実感した。

私は、一期一会という言葉が好きだ。一生に一度の出会いで、人生が変わる時もある。試合や、練成会等で指導して下さる先生方や仲間一人一人に感謝の気持ちを絶対忘れない。

人生は、一度きり。そのなかで、私は何があっても剣道はやめないと決めた。先生方、友達、仲間、両親、すべてに感謝し、初心を忘れず、将来の大きな目標に向かって、努力し続けたい。

そして、これからも一日一日を真剣に生き、先ず心を正し、常に前向きな行動と感謝の気持ちを忘れず心も豊かに成長していきたい。

『私の進む剣の道』

愛媛県西条市
吉岡剣道会
小学６年生　　大　西　さくら

私が剣道に出会ったのは小学２年生の春。初めは張り切っていたのですが、３年生になる頃には、週３回ある基本けい古も面倒に思いながらの毎日を過ごしていました。

その考えが変わってきたのは４年生の初夏、夏休みの終わりにある愛媛県レディース剣道大会がきっかけでした。その大会で私はどうしてもＡチームに入りたかったのです。元々負けず嫌いの私は、手足にマメができてそれが破れてもテーピングをして必死に頑張りました。そしてやってきたオーダー発表の日、先生が先鋒に私の名前を呼んで下さったのです。とてもうれしかった事を今でもよく覚えています。指導して下さる先生はいつも「努力は自分をうら切らない。」と、言われています。この言葉を胸に、思いが一つかなった私は剣道が大好きになっていったのです。

その気持ちを持ったまま５年生になり、私は７月に扁桃腺の手術をしました。自分が納得するまでけい古をするとすぐに熱を出すようになったからです。もちろん手術は怖かったのですが、休みながら剣道をするのはもっと嫌な事だと母に伝え、その場で大きい病院への紹介状を書いて頂き、手術を受けました。

退院して、久しぶりに竹刀を振った時、自分が思う以上に体が動かなくてびっくりしました。１日

休んだのを取り返すには３日間のけい古が必要な事を身をもって感じながら、大好きになった剣道への気持ちを信じて少しずつ動きを取り戻していくようにしました。

そして６年生になり、悩む事などなく毎日を過ごすものだと思っていた自分に待っていたのは結果を出せない現実でした。「勝ちたい。」が次第に「勝たなければいけない。」と、試合だけでなく弱い心に負ける日々。夏には強い頭痛に悩まされるようになり、受診先の病院では「起立性調節障害」と「脳下垂体肥大」の診断。内服に合わせ定期的なＭＲＩ検査の必要があると説明を受けました。

心だけではなく体にも不安を抱えていた時いつものけい古で４年生の後輩に二本負けしたのです。そのしゅん間、自分の中でこらえていたものが一気にあふれ出し、私はボロボロと涙を流していました。

「いつものように頭が痛いだけ。」と、心配してくれる仲間や先生方に説明して最後までけい古を行った後、母の車に逃げるように飛び乗りました。そこで「もう私なんか二度と勝てんのよ。」と、ダダをこねるように泣きじゃくり、家の駐車場に着くなり「家にも帰らん。」と、車の後ろに座りこみました。そんな私に母がぽつりと言いました。

「さくらは、さくらなりに苦しいんやね、こんなに追い込んでしまってごめんね。」

母の頬にも涙が伝わっていました。母にもう一度車に乗るように言われたので言われるまま乗り、家の近くにある広場に着きました。そこにけい古を終えた先生がかけつけて下さったのです。おどろいている私に先生は

「さくらは一生けん命けい古している。その芽がなかなか出なくて辛かったんやな。お前には実力がある。もっと自分のけい古と力を信じなさい。今のけい古の内容は、お前のために考えたものなんぞ。」

とても優しい声で語りかけて下さいました。時間にすると20分ぐらいでしたが私にはとってその時間は宝物です。勝負よりも自分の努力の方が大切だと気付いた私は、色んな迷いを吹っ切る事が出来たのです。

そんな私には夢が二つあります。一つ目は、保育園の先生になるという夢。二つ目は、あの時話をしてくれた先生のような優しさを持つ剣道の先生になり、保育園の先生をしながら吉岡剣道会で指導したいという夢。あの日の自分のように思い悩んでいる子が居たら少しでも力になり支えたいのです。この二つの夢をかなえられるよう、私は大好きな剣道と一緒に前を向き道を進みたいと思います。